

アジアの中の日本・横浜を考へる

① タイで過した幼児期 エックへの手紙(入市民の作文 その一)

藤本典子

エック、あなたは私を覚えていますか？今から一三年前のことです。父の仕事の都合で私が二歳八カ月の時タイへ渡り、あなたのお父さんの経営するアパートに三年四カ月住んでいたのです。

今、私の目の前には、バンコクでの生活を写した二十数冊ものアルバムと、一冊の「all about Thailand」と書かれた三センチもの厚さのある立派な本が置かれています。そして、この数多いアルバムの中の一冊に、エック、あなたが日本人の子供達六人と共にいるのです。たしかあなたは私より二歳ぐらいたったような気がしますが、家主の子供で

あるあなたは、私達とはあまり遊ぶ機会が与えられなかったようですね。でもこの写真はこの中の子供の誕生日にお互いが招かれたものであり、私にとってあなたと共に写っている写真として尊いもの一つとなりました。

そして、もう一方のこの「all about Thailand」は、私達がタイを離れる前日、あなたと一緒に私達の部屋を訪れたあなたのお父さんが私に手渡してくれたものなのです。その時私は六歳でした。ですから私には「タイ女性がタイのきらびやかな冠をかぶって踊っている美しい表紙の厚い本をもらい、私はコケシ人形

をエックにあげた」ただそれだけの記憶をきりないのです。

でも今こうして母と共に十数年前を顧みながら語り合っていると、タイが身近に思えてなりません。

手作りの魚の干物を並べてあるベランダ、数々の珍しい果物の並ぶ市場、ピンクや白い色のブーゲンビリアや紫の美しい花を背に母に抱かれて満足げな顔をしている私、日本とは全く趣の違った金色に光るバゴダのあるお寺、フィリピン人の園長先生のいた幼稚園での生活、また日本の江戸時代に山田長政が活躍して日本人町として盛えたアナタヤ。そして、

① タイで過した幼児期——エックへの手紙

——藤本典子

② わたしの中の地図・日本と東洋と

——沢 宇実

③ アジアと私——ビルマと私の三十年

——土橋泰子

④ 都市レベルの国際交流——国連アジア・太平洋都市会議の開催にあたって

——岡部重之

⑤ アジアと日本——岩崎駿介

呼びとめる言葉を知らなかったために行ってしまった情けない思い出のあるアイスクリーム屋のおじさんの車の後姿の写真までもが、なぜか貼ってあるのです。

もう私はなつかしきで一杯です。このアルバムの写真の一枚一枚は私の幼児期の足跡なのです。でも、ここで私はただ思い出に酔ってばかりいられないことに気づきました。何冊目かのアルバムから弟が登場するようになりました。

タイに渡った時は三人だった家族も、帰国の時は四人になりました。弟は私が五歳の時に生まれたのです。でも弟の生まれる一年前に母は輸血をしなくてはな

出来たらどんなに素晴らしいことでしょう。

エック、お互いがんばりましょう。ごきげんよう。

サワデーカー。
△横浜市西区・中学生・一五歳▽

●市民作文、わたしの中のアジアと日本に最優秀賞作品

② わたしの中の地図・日本と東洋と

沢 宇実

もうずっと昔、十数年以上前になるが、学生としてパリに滞在していた時のひとつの情景がまだに私には忘れられない。それはちょうど夏の終り、私が寄宿していたスペイン人修道女の経営する女子寮でも、永い休暇を利用してフランス語を勉強しに寄り集まってきた学生たちが、各々の国に散りだした時のことなのだが。建物の中は娘たちのざわめきで騒然としていた。そんな中で、突然、韓国人留学生の大声が響いた。私たちは日本語で語り合う仲だったので、何事かと飛んで行ってみると、小柄な彼女の眼の前に、履き古された大きな靴が幾つも転っていた。「ひどいわ。いらんかいらあげる、と言ってメキシコの女の子が

私に投げつけるように置いていったの。すごい侮辱よ。東洋人のひとりとして決して許せない！」
その東洋人のひとりという言葉に私は衝撃を受けた。私の中には、私は日本人であるという自覚はあったが、東洋人であるという意識は見つけることができない。パリの路上で我々はたびたび異国のさまざまな男から声をかけられたものだが。「中国人かい。ヴェトナム人？」。その都度私の仲間はむきになって叫びかえしたものだ。「日本人ですよ」と。その声の響きには、間違えられちゃ困る、という得体の知れない一種の傲りが潜んでいなかったらうか。私たちの中に東洋の仲間としての連帯感があれば、

ヴェトナム・中国、あるいはタイ人と言われようが、微笑して聞き流すことができたのではないか。
一韓国人のひと言から受けたショックは今もなお、あるいはより明確に私の中に蘇ってきて問いをつきつけてくる。お前の地図は東洋まで拡がったかい、と。
現在私は横浜中華街と山下公園にはさまれたところに住んでいる。私共の部屋は子供ふたりの成長とともに手狭になってきたので、早晚、主人の通勤により便利な余所に引越すことになるだろう。あの夜、私は一〇階の窓から夏の夜空に点滅する中華街料理店のネオンを見下しながら、何となく感傷的な気分になっていた。山下公園の銀杏並木も元町も外人墓

地も、それに中華街ともいつかさよならする時がくるだろう。日本の中でも特殊な雰囲気のあるこの界隈を私は愛してしまっているのに、特に華僑のこんな大きな集団はよその土地には無いだろうに、一体私はあの人達の何を見、何をわかったのだろう。ただ、外側から遠眼で覗いただけだ。あの人達のことを少しでも知りたい。仲良しになりたいなあ、と私は思わずにいられたかった。
偶然、そのチャンスは間もなくやってきた。中華学院保育園で園児を募集している情報を得たのである。たまたま、下の娘が三歳になると同時に、急に外界に關心を示し、友達を求め出したのに、家の周辺には恰好のお仲間が居なくてかわ